

## 縦横無尽 タテとヨコ 色とかたちのフィールドワーク(1) : 私の染織探求の原点 : 連載を始めるにあたって

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	268
ページ	36-38
発行年	2003-07-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5214">http://hdl.handle.net/10502/5214</a>

# 縦横無尽 タテとヨコの 色とカタチ のフィールドワーク 吉本 忍

## 私の染織探求の原点

連載を始める  
にあたって

### 『染織と生活』と私

『月刊染織』の前身であった『季刊染織と生活』が創刊されて今年で30年になる。染織と生活社が出版してきたこれらの雑誌が刻んできた歴史は、わたしの調査研究の歴史とも重なり合っている。というのは、1970年のインドネシアのティモール島に始まるわたしの調査研究の中で、初めての原稿を執筆したのが、1973年4月に出版された『季刊染織と生活』の創刊号だったからである。

当時のわたしは、京都市立芸術大学の美術専攻科を修了したばかりの24才という若輩で、定職についてもおらず、将来についての明確な進路を見定めていたわけでもなかった。要するに今でいうフリーターのひとりであつたというのが最も当たっている。そうした折に、大学時代の恩師で染色作家の佐野猛夫先生を介して、染織と生活社の富山弘基氏から『季刊染織と生活』の創刊号への執筆依頼を受けた。

わたしが初めて執筆した原稿は、創刊号の冒頭を飾るグラビア(特別ルポ・南方染織の源流を往く―インドネシア東方の島々―)と、連載となった本文中の記事(特別ルポ・イン

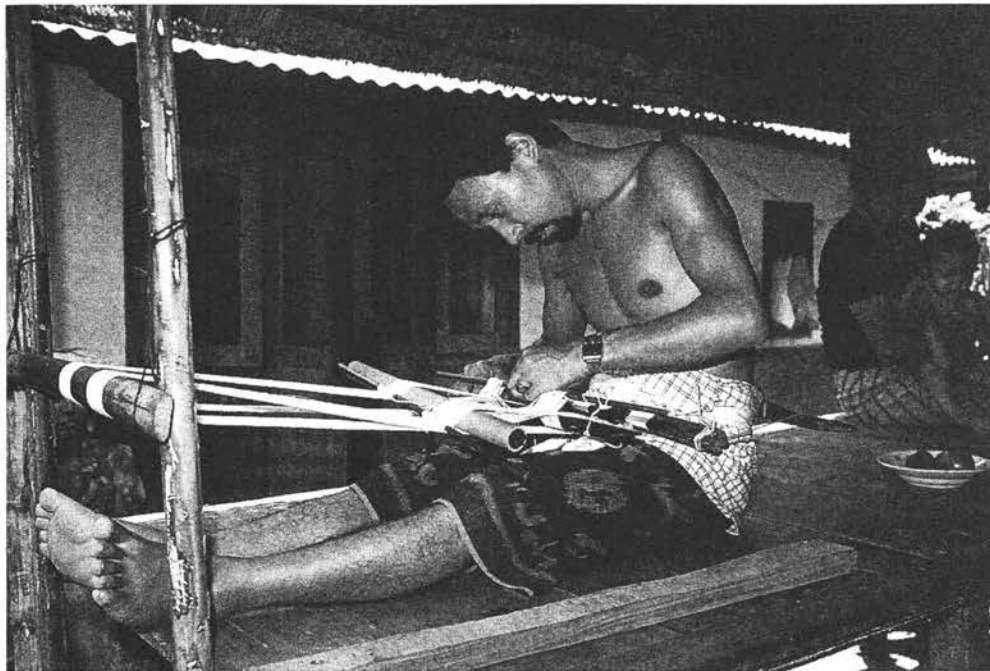


初めて原稿を書いた『季刊染織と生活』創刊号のグラビアと表紙・題字

ドネシア東方の島々―小スンダ列島の緋織物―)であった。当時を振り返ってみると、『季刊染織と生活』の創刊号への執筆が、その後のわたしの研究者としての方向性を決定付けたといえる。ちなみに創刊号の連載記事の末尾には、肩書きが「染織家」と記されている。この肩書きは編集部によるものであつたと記憶しているが、同年8月に発行された2号の連載記事の肩書きは、おこがましくも「染織研究家」と改めた。

### イカットの現場へ

今と違って1970年当時は、誰もが海外に行くという時代ではなかったし、世の中には大学紛争の嵐が吹き荒れた後の閉塞感が漂っていた。そうした時代にバリ島の東方約1



インドネシア・バリ島トゥンガナン村で機織りをする若き日の筆者(1983年)

バリ島トゥンガナン村にて (1981年)  
(左が筆者)



000キロメートルの小さなティモール島に出掛けたのは、芸大で探検部に所属し、工芸科染織専攻の学生であったことが関係している。また、行き先をティモール島としたのは、大学の図書館から探し出した、当時としては珍しいインドネシアの島々の伝統的なテキスタイルを紹介した『南方染織図録』(京都書院1959年)の中に、イカットと称する緋織物を見だし、それらが作られた現場のうちでは、ティモール島が最も行きやすいと思われたからである。

今でこそイカットといえば、少なからずそれがインドネシア(マレー)語を語源とし、緋を意味する世界共通の染織専門用語であることは知られている。しかし、1970年代にはインドネシアの人びとの間でさえ、イカットが緋を意味する語としては理解されていなかった。ましてや、日本ではインドネシアが世界有数の緋の宝庫であり、とりわけティモール島をはじめとするヌサ・トゥンガラ

(小スンダ列島)の島々に幾多の少数民族が割拠し、民族ごとに独特の色とかたちで裝飾された多様な緋技術の伝統が生き続けている様子については、ほとんど知られていなかった。

6月の梅雨空に煙る大阪空港を後にしたわたしは、初めての海外旅行の第一夜をバンコクで過ごし、翌日インドネシアの首都ジャカルタに入った。日本を発つた日は、偶然にもインドネシア独立の父として知られるスカルノ元大統領が逝去した日と重なった。それは第二次世界大戦後に独立したインドネシア共和国の草創期が名実ともに終焉した日でもあった。

入国審査では当時インドネシアに長髪禁止令が出されていたために、芸大入学以来の長髪を強制的に切られる羽目になった。また入国後には、在ジャカルタ日本大使館から、バリ島以東の僻地に行ってもらっては困るというクレームもついた。すべてが初体験のひとり旅の間には、その後もさまざまなハプニングがあった。ジャカルタからバスと列車とフェリーボートを乗り継いでバリ島までたどりついた後、古めかしいDC3型機で最終目的地であるティモール島に飛び、東ヌサ・トゥンガラ州の州都クパンのひなびた空港に降り立った。

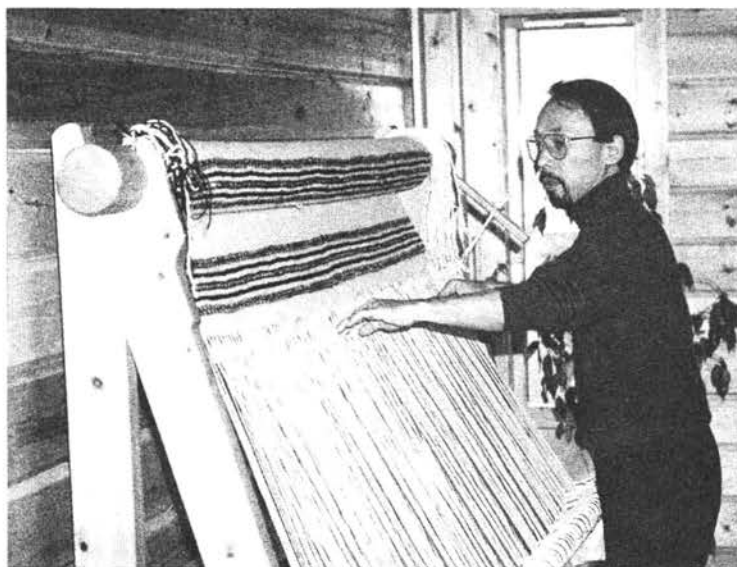
## フィールドワークの初仕事

ティモール島に行く決めてから懸念していたことがあった。それは、緋作りの伝統が生き続けているのか否かということであった。しかし、空港施設の内外に詰め掛けていた人たちの多くが腰に緋の織物をまとうているのを目にして、そうした懸念はすぐさま吹き飛んでしまった。飛行機から荷物が降るさ

れてくるまでの間、緋をまとった人たちのお尻のクローズアップ写真を撮りまくった。それが、わたしの今日までのフィールドワークの初仕事となった。

クパンでは、緋が作られている奥地の村々を巡るための車の手配などをして数日過ごし、その後、フィールドワークの最初の現場となったニキニキ村を訪れた。日本から大学生が緋の調査にやってきたという州の産業局長からの知らせが、ラジオ放送によってあらかじめ伝えられており、村はお祭り騒ぎとなっていた。広場には緋織物を着飾った女性たちが、郡役所からの指示で、糸作りから緋括り、染め、そして織りに至る作業工程を見せようと待ち受けていたのである。あまりの歓待に感激しながら、覚えたてのカカトのインドネシア語とつたない英語で通訳を介して、さまざま調査を始めた。そうしたフィールドワークの初日には、その後のわたしの調査研究の原点となった、驚くべき事実を目の当たりにした。

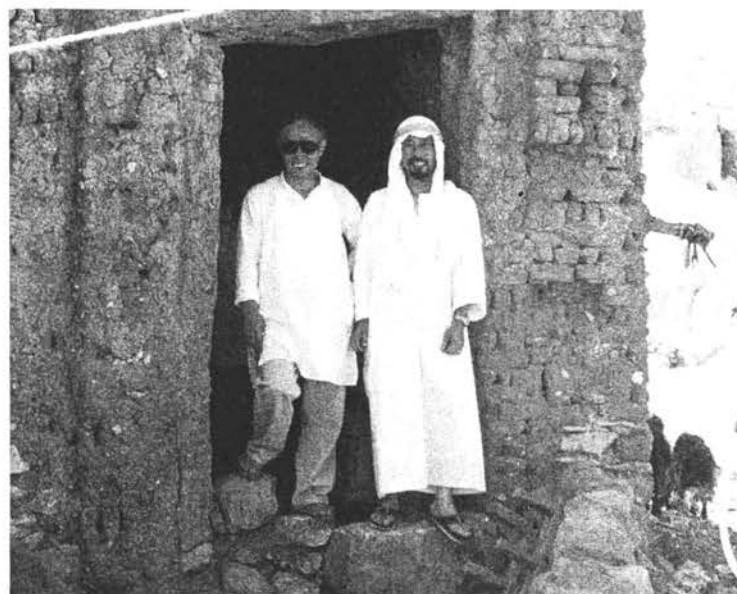
それは、輪状の織物が織られているということであった。芸大で曲がりなりにも機織りの実習をしていたわたしにとって、織物は四角いものであるとばかり思っていた。しかし、そうではない輪になった織物を突如見せられたわけである。どうしてこんな織物を織ることができるのか、どうしてこんな織物が存在するのか。当惑し、混乱した頭では、すぐには理解できなかったが、機にタテ糸を掛け渡す前の整経作業と、それに続く機織りの作業工程を見て、ようやく納得がいった。わかつてしまえばなんのことはない。タテ糸は2本の棒(先端棒と手元棒)にらせん状に掛け渡して輪状に整経し、機織りは上下2層になったタテ糸の上の層で行っていたのである。



ノルウェーの北極圏でサーミ人の錘り機の調査をする (1995年)

## 機織りを求めて世界を巡る

この1970年のティモール島を皮切りに、今日に至るまで、わたしはテキスタイルの現場を走り回りながら、フィールドワークを続けている。調査地はしばらくはインドネシアが中心であった。その間の主な成果には、『インドネシア染織大系』(上巻/1977年、下巻/1978年、紫紅社)、『インドネシアの金更紗』(1990年、講談社)、『ジャワ更紗』(1996年、平凡社)などをはじめとする著作、インドネシアやインドの染織を取り上げたいくつかの展覧会の企画監修などがある。従って、わたしの専門については、一般にはインドネシア染織、あるいはジャワ更紗やイカットの専門家として、ご理解をい



エジプト、ルクソールにて (1997年、右が筆者)

ただいている向きが多いようである。もとより、そうしたご理解は間違っていないが、わたしのフィールドワークはインドネシアから次第に世界中へと向かい、これまでには、東南アジア、オセアニア、南アジア、東アジア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、中央アジアでも調査を行ってきた。その調査研究で柱としているテーマは、世界の機織り技術の網羅的な研究であり、特に織機型式の構造や機能に注目した比較研究を続けている。

## 常識を超えるテキスタイルの魅力

インドネシアに続く、世界の広範な地域でのフィールドワークは、1970年のティモール島ニキニキ村で見た輪状織物が原点とな

っている。そしてその後の世界各地での調査においても、常識では考えられない、数々の驚くべき事実が明らかになっている。織物の形状についてのみ取り上げてみても、これまでに輪状織物以外に、チューブ状、あるいは丸紐状の織物、枝分れ状の織物、部分的に布面が隆起した織物などの存在が挙げられる。

30年を超えるわたしのテキスタイルにかかわる調査研究については、今後さまざまなかたちで成果報告を考えている。そうした成果報告のひとつとして、『月刊染織』で、連載をさせていただくこととなった。テキスタイルについては、これまで一般には、美的観点に重点が置かれてきた。そうした傾向は、それはそれで結構ではある。しかし、この分野におけるわたしの研究上の興味は、機織り技術が人類史の中核的な柱として古代から現代にわたって脈々と生き続けてきたということや、テキスタイルのグローバル化が現代社会におけるグローバル化よりも、はるかに先行する時代から進行してきたことなどである。

そうしたテーマを中心としたフィールドワークの現場では、織物の形状以外にも常識では理解できないさまざまな驚くべき事実にはしばしば出くわしている。今後の連載では、それらの発見をはじめとした世界各地のテキスタイルのありさまを、できるだけわかりやすく、できるだけ簡潔に紹介したいと考えている。どこまで編集部や読者の方々のご期待に添えられるのかわからないが、以上を連載を始めるに当たってのご挨拶とさせていただきます。

(国立民族学博物館 民族文化研究部 教授)

よしもと・しのぶ